

高祖道元禪師と太祖瑩山禪師

東 隆 真

—

東 隆真でございます。

ただ今、竹内道雄博士から、過分のお言葉をもってご紹介をいただき、恐縮しております。どうかよろしくお願ひ申しあげます。

私は、曹洞宗の宗学ないし宗学思想史の学徒として、曹洞宗の高祖道元禪師と太祖瑩山禪師およびその時代の宗学思想の研究に従事してまいった者でございます。

ご高承のとおり、宗教法人曹洞宗には、国家の憲法にも規定すべき宗制なるものがございます。曹洞宗の宗制は、大きいくいえば、宗憲と規則と規程の三つから成り立っています。

この曹洞宗の宗憲 第一章 総則 第四条は、本尊を規定

して
本宗は、釈迦牟尼仏を本尊とし、高祖承陽大師及び太祖常済大師を両祖とする。

2 寺院に奉安する本尊については、特例を設けることができる。

と明示しております。

でありますから、曹洞宗は本尊を釈迦牟尼仏とし、ついで高祖道元禪師（承陽大師）と太祖瑩山禪師（常済大師）を両祖として尊崇するのであります。それゆえ、およそ曹洞宗の僧侶、檀信徒は、本尊と両祖について正しい理解をもち、尊崇の念をいだいて、信仰生活をおくるわけであります。

しかし、高祖道元禪師については、数百種をこえる研究や解説がなされておりますから、曹洞宗の僧侶、檀信徒のみな

高祖道元禪師と太祖瑩山禪師（東）

高祖道元禪師と太祖瑩山禪師（東）

らず広く知られておりますが、太祖瑩山禪師については、残念ながら、とうてい高祖道元禪師に及ばないのであります。

それどころか、曹洞宗の宗祖はお一人でよい、道元禪師だけが宗祖であるといったお考えを曹洞宗の一部の僧侶ですがおもちになつていらっしゃる、時にそれが曹洞宗の要路に立つてお方のなかにもみうけられるのであります。これは、明らかに宗憲を無視した考えであります。いま、そうしたあやまつた意見の事例をご参考までにご紹介してもよいのであります。時間が都合上、はぶくことにいたします。

皆さん。考えてみて下さい。曹洞宗というこの宗名ですが、これは中国の禅宗の祖師のお名前、お二人のお名前から出来ているではありませんか。曹は曹溪慧能禪師を指すとも

曹山本寂禪師を指すともいい、洞は洞山良介禪師を指すといいます。とともに、お二人の名前を合せて曹洞宗といつておる。そもそもお二人の祖師によつて成立していいるからそれにもとづいてこの宗旨の宗名が出来ている。似たような例は、ほかに鴻仰宗もそうです。鴻山と仰山という師と弟子の名前が付けてあるのが鴻仰宗です。日本の曹洞宗の宗名問題については、ここでは論じつくすゆとりがありませんから他の機会にゆずりますが、私たちの宗派の名称すら、すでに二

人の祖師の名前によつて成り立つてることを再認識していただきたいのであります。

曹洞宗の檀信徒のなかにも、曹洞宗には、どうして二つのご本山があるのであるが、お二人の宗祖さまがいらっしゃるのですかといった疑問をおもちの向きもあるやにうかがいます。

まあ、檀信徒のお方がこのようにお感じになるのは、ご住職の教化がゆきとどいていないこともあるって、あるいはやむをえない、そんなことをあるかも知れませんが、曹洞宗の僧侶が、両祖さまの位置づけについて認識が足りないと、いうのは、いかがなものか。僧侶としての信念と教化力を疑わざるをえません。

いったい、曹洞宗には、お二人の宗祖ともいすべき高祖道元禪師、太祖瑩山禪師がいらっしゃるのは、曹洞宗だけの特異な現象であるかのように見ている人が多いようです。たしかに、それはあながちまちがいとも言えないかも知れません。が、広く日本の仏教ぜんたいを見わたしてみると、他宗派にも同じような状況がみられるのではないだろうかと、私は思います。

たとえば、日本の天台宗では、中国の天台宗の設立者天台

大師智顥を高祖大師とあがめ、日本に天台宗を伝えた伝教大師最澄を宗祖大師と申しております。そして、日本の天台宗は、第四祖慈覚大師円仁、第六祖円珍、中興の祖といわれる慈恵大師良源の存在を無視できない。なかんずく、第四祖慈覚大師円仁にいたって、密教を導入し、淨土教を展開させることによつて、日本天台の思想体系をつくり、台密の基礎を固めたといわれています。伝教大師最澄の時点では、まだ日本の天台は不宗全であつた、慈覚大師円仁にいたつて完成したとすらいわれます。私が言つているのではない。天台宗のお方がそうおっしゃつてゐる。

また、真言宗の古義（高野山派など）では、宗祖は弘法大師空海であり、新義（豊山派、智山派）では、開祖は興教大師覺鑑であります。しかし、弘法大師空海は、高祖弘法大師とよばれる場合がありますし、新義真言宗豊山派では、弘法大師空海と興教大師覺鑑を両祖大師といった表現をすることがります。

淨土教でいいますと、日本の専修念佛の元祖は円光大師法然であります。淨土宗ではそういうつてゐる。そして、淨土宗では、中国の善導大師を高祖とあがめています。

淨土真宗では、宗祖は見真大師親鸞であります、親鸞聖

人はまた太祖の称号でよばれることがあります。そして、真宗中興の祖といわれる人物が、第八代慧燈大師蓮如であります。

私に言わせれば、天台宗の場合、智顥が道元禅師だとすれば最澄が瑩山禅師に、最澄が道元禅師だとすれば円仁は瑩山禅師に、真言宗の場合、空海が道元禅師ならば覺鑑は瑩山禅師に、淨土教の場合、法然が道元禅師ということになれば、親鸞は瑩山禅師、親鸞が道元禅師ならば蓮如は瑩山禅師とうふうになぞらえてみることもできるのではなかろうか。

時代も性格も事情もそれ異なるのに一律に機械的にあてはめて措定することが乱暴なことは重々承知して いますが、要するに、私が申しあげたいのは、一家でいえば両親といいますか親子といいますか、そういうお立場のかたが申し合せたように登場なさつて、それぞれの宗旨、宗団を成立、発展させてきたのだということであります。

その父親の役割りをもつた祖師、母親の役割りをもつた祖師、あるいは親の立場に立つ祖師、すぐれた子や孫の立場に立つ祖師を、高祖、太祖と曹洞宗のようにはつきりと決めてよんでいるかいなかは、その宗団、宗派の事情によつてそれぞれに異なるであります。曹洞宗の場合は、曹洞宗の

歴史的宗団的な独自の事情によつて、高祖道元禅師、太祖瑩山禅師と明示してゐるのであります。しかも、その寺院数、僧侶数では、曹洞宗は、日本で最大の仏教教団であります。

にもかかわらず、他宗派のように分派していない。天台宗はおよそ一〇派あまり、真言宗は一一派を越え、淨土宗も五派にあまり、淨土真宗も一〇派を出るのです。しかし、曹洞宗は曹洞宗一宗で統一されております。いわゆる宗務行政の面では、いわゆる永平寺系、いわゆる總持寺系の両派に対立して物議をかもすことがありますので、外部から曹洞宗ではなく騒動宗などと揶揄されます。残念なことです。たしかに、両派が分裂の危機を幾度もくりかえしてきたのです。それは否定できない。にもかかわらず、決定的な分裂には至らず、一曹洞宗としてまとまりをみせて今日に及んでいるのは、注目すべき史実であります。

か、ほんとうの仏教とはなにかということにたいへん苦しみまして、苦しんで苦しんで、その結果、家をとび出したのであります。

そして、淨土門の寺へ入り、更に転じて、曹洞宗のお寺の小僧となつた。それは、私の十代のことです。

曹洞宗のお寺の小僧となつたとはいふものの、当時の私は、曹洞宗がどんな宗派なのやら、どんな教えを説いているのやら知りません。いわんや道元禅師のこととも瑩山禅師のことも何も知りませんでした。

私の得度の師匠は渡辺頼応という人で、このかたは偶然にも私とおなじ京都府の出身です。在家でありながら東京帝大の印哲を出まして、五〇歳すぎて出家した独身の僧でした。一風変った人として周囲からみられていましたが、私には、天真らんまん、純真、高潔のモデルのような淨らかなお方でした。この渡辺頼応老師にふとしたことからご縁ができて、このお方に魅かれて、私は、はるばる、ひとり海を渡つて、徳島県の辺境、無檀無祿にひとしい寺とは名ばかりの貧院、城満寺にたずねていつたのであります。

私は、真言宗の寺院の長男として生をうけた者でございまして、もともと曹洞宗とは縁もゆかりもなかつたのです。

だいたい、坊さんになるのは大きらいでした。ところが、或ることを契機として、あらためて、自分の生きる道はなに

いう次第であります。

たまたま曹洞宗であつたと申しましたが、頼応老師の住職地、城満寺こそ、實に、太祖瑩山禪師の初開の道場であつたのであります。

たまたま城満寺であつたばかりに、私は曹洞宗の僧侶になつたとたん、瑩山禪師とのご縁が結ばれたのであります。

私は、やがて神奈川県横浜市鶴見の大本山総持寺僧堂に掛錫いたしました。実は、福井県の大本山永平寺僧堂に行つた方がよいかと師匠もはじめは言つておりましたし、私もそのつもりでいたのです。永平寺という寺の名前は聞いたことがあるように思うけれど、総持寺は知りませんでした。しかし、當時、大本山総持寺の住職は渡辺玄宗禪師であります。渡辺禪師は渡辺頼応老師の本師であります。頼応老師は滝野といつたのですが、禪師の養子となつて渡辺姓を継いでいたのです。つまり、私は渡辺禪師の孫でしということになります。それで、今のうちにおじいさんにあたる禪師さまのことで修行させてもらうのがよいだらうということになつて、総持寺の方に決つたわけであります。そういうわけで総持寺に決つたのでして、私の意志で決めたのではありません。

渡辺禪師は八八歳のとき、石川県門前町の大本山総持寺祖

院（当時は別院といいました）に隠退なさることになり、頼応老師も随侍して塔頭の芳春院住職となりました。そこで、私は学生時代、師匠と禪師のもとに帰省しましたので、大本山総持寺祖院のお世話をになりました。

また、私の本師は石川県金沢市の大乗寺の住職であつた松本竜潭老師です。竜潭老師は、渡辺禪師のいちばん古いお弟子です。ですから、大乗寺にもご縁ができました。今の大乗寺住職板橋興宗はたつた一人の兄でしです。

城満寺は瑩山禪師の初開道場、総持寺は瑩山禪師の開山地、大乗寺は瑩山禪師が第二代の住職地でありますから、その後もずっと瑩山禪師ゆかりの古刹で育てられたわけであります。

話は少しもとへ戻りますが、城満寺時代、大本山総持寺時代の私は、太祖瑩山禪師のことについてなにほどの知識ももちあわせていませんでした。おはずかしいことです。

大本山総持寺僧堂から駒沢大学仏教学部禅学科にすすんだのですが、卒業論文は「涅槃經の研究」であり、同大学院人文科学研究科仏教學専攻修士課程の修士論文は「天台仏性思想の研究」（いづれも指導教授は小川弘貫博士）であります。これは、禪学科の専攻の者にはふさわしくないテーマとい

高祖道元禪師と太祖瑩山禪師（東）

えるかも知れません。禪学科といえば、道元禪師とか『正法眼藏』とか、そういう研究テーマの方が禪学科の学生らしい。実は、私は、駒沢大学へ入つたら、瑩山禪師や『伝光録』などについて理解を広げようとは思つていきました。光地英学先生が、僧形の私を呼びとめて、「君は、どこの小僧か。なに阿波の城満寺か。城満寺にはなにか瑩山禪師ゆかりの遺品でも残つてゐるかね」とたずねられたこともあります。

私が、仏教学部の某博士に、瑩山禪師を研究してみたいといふ意味のことをのべたところ、「瑩山禪師の研究？ そんなことはつまらんから、よした方がよい」といふと、べもなく一蹴されてしまつたことがあります。

これはいつたいどうしたことか。鳩が豆鉄砲をくらつたような感じでした。

悶々としているとき、紫竹林学堂道憲寮の先輩が、助言を与えてくれました。

禅学科の学生は、いきなり禪学、宗学に入らないで、まず、人間の文化一般、宗教学、宗教哲学をひととおりおさめ、インド仏教、中国仏教、日本仏教の歴史や教理を概観し、次に代表的な經典や論書を探究し、それから禪学、宗学に入つてゆくのがよい——要するに広い視野をもつことが大切だと

いうことです。富士山の頂上をきわめるには、なだらかなすそ野から一歩一歩のぼつてあたりの景観をたしかめながら登つていつた方がよいといった意味でしょうか。

そんなことがありまして、大乗仏教の代表的教理のひとつ仮性、法身の問題にとりくみ、さきに申しあげたような卒業論文、修士論文のテーマになつたわけです。

私が、瑩山禪師の研究に本格的に打ちこむようになつたのは、大学院修士課程を修了後のことです。

今日、一般には、私は、瑩山禪師の研究者ということになつてゐるようです。たしかに、私は瑩山禪師について研究しています。が、瑩山禪師だけを研究しているのではありません。道元禪師についても研究しております。というと語弊があるかも知れませんが、私の瑩山禪師研究の基本姿勢は、道元禪師と瑩山禪師を同時的に、複眼的に、雙照的にとらえようとしているのであります。口はばつた言い方になりますが、このような基本姿勢によつてのみ、曹洞宗の両祖（高祖道元禪師、太祖瑩山禪師）一体の宗学がはじめて確立する、私は考へています。

もつとも、これは、私が初期の日本曹洞宗の歴史や宗学思想の流れをしらべてゆくうちに、おのずから到達したところ

ろでありまして、はじめからこのような枠組みを決めて研究をしてきたのではないことを、くれぐれも誤解しないでいただきたいのです。

しかし、私が瑩山禅師の研究をはじめるにあたって気がついたことは、資料がきわめて少ないと、研究がほとんど進んでいないことでした。そうして、更におどろいたことは、瑩山禅師の研究は、宗門の一部では必ずしも歓迎されていないという風に感じざるをえない雰囲気がただよっているということでした。直前にちょっと申しました仏教学部の某博士のご発言にもそのことが読みとれます。

しかし、そうしたことを、私は、瑩山禅師の研究をすすめてゆく過程で、その後も、現実に、いやというほど味わうことになったのです。そんなこともあくまで、二、三のエピソードをお話します。

昭和四五年、私は、愛知県知多郡東浦町の曹洞宗の古刹、乾坤院にある現存最古の写本『伝光録』を復刻し、校注を添え、解題を付して刊行しました。『乾坤院本 伝光録』(隣人社刊)です。

乾坤院本『伝光録』は、貴学の田島柏堂博士が、乾坤院から発見し、昭和三五年、学界に紹介されました。室町時代に

成立した写本であります。それまで『伝光録』の原本は散逸し、その写本としては、江戸時代のものが数本しか出ておらず、『伝光録』そのものの成立についても疑撰説が横行していましたので、乾坤院本が新しく世に出たことは、すこぶる重要な意味をもっています。

私は、愛知県知多郡南知多町の影向寺に、乾坤院住職長尾説道老師を訪い、田島先生への紹介状をいただき、長尾通之先生のご協力をいただいて、楠元町の愛知学院大学図書館へ赴き、全紙をカメラにおさめたのでした。こうして、現存最古の乾坤院本『伝光録』の全容を、はじめて宗門、学界に公開することができました。

これは私の処女出版であり、自費出版であります。刊行費用の捻出ではずいぶん苦労しました。兄でしの板橋興宗から借金したり、私学研修福祉会の研究助成の補助も加えて、ようやく出版費ができました。

印刷所は銀座三丁目の東銀座印刷というのですが、写真植字を担当してくれた若い実務社員は、途中で病気になりました。お見舞いにいったところ、「こんな難しい仕事ははじめてです。それだけに、私にとっては一生の思い出になります。私の誇りになります」といつておりました。ベッドのう

高祖道元禪師と太祖瑩山禪師（東）

えで、自分が打つたゲラをやさしくしみじみなでていたのが印象的でした。

恩師の鏡島元隆博士（現駒沢大学総長）は、拙ない悔済ぎわまる原稿を丹念に目を通され、ひとつひとつご親切なご教示をこまごまといただきました。拝読していく、私は涙が頬をつたわってまいりました。

恩師の故小川弘貫先生（駒沢女子短期大学初代学長）には序文をいただきました。目を細めて過賞して下さり、自由ヶ丘の小さな中華料理屋でしたが、その二階で、出版祝賀会を開いていただいたのです。小川先生、鎌田茂雄、鈴木格禪、太田久紀、平井俊栄、寺田利緒、そして村上直（のちに法政大学文学部長、文博）、隣人社長宮沢尉（中里介山の甥）の諸先生といった少人数でしたが、まことに心のこもった実のある集いで、私にとってははじめての出版祝賀会でした。私は、ひしひしとよろこびを味わったのでした。

後日、どこから聞きつけたのか、駒沢大学学監の藤田俊訓先生が、小川先生のところにおいてになり、「東君のこのたびの出版は、小川先生の駒沢学園にいるから出来たことだ。駒沢大学に居たのでは出来ないだろう」と言ってくれたよと、小川先生が伝えて下さいました。

なおつけ加えておきますと、貴学の川口高風先生は、昭和五三年に発見された『瑞泉寺本伝光錄』（瑞泉寺刊）を出版されており、昭和六〇年に新発見の『永沢寺本伝光錄』（名著普及会刊）を公刊されております。両著の解題によりますと、川口先生は、拙著『乾坤院本 伝光錄』の解題に、尾張地方の曹洞宗寺院ないしは乾坤院と関係の深い寺院に、乾坤院本と同系統の写本あるいはこれらの底本的地位の写本が伝播し、現存しているのではないかと確信しているとあるのに興味をもつたと述べておられます。お言葉どおり、私の小さな提言が、川口先生の『伝光錄』写本の発見、紹介に一役買つていてるとすれば、同学の一人として望外のよろこびとするところであります。現時点で、『伝光錄』の写本は一九本余りが所在を明らかにされております。そのうち愛知県から六本出ており、ほかのどの地域よりもいちばん多いのです。

昭和四九年は瑩山禪師六五〇回大遠忌の年であります。大本山總持寺はもとより、曹洞宗を挙げて五〇年に一度のこの聖業にとりくんだことは、申すまでもありません。

これに先だって、大遠忌記念事業の一環として、曹洞宗の機関誌『曹洞宗報』（月刊。曹洞宗宗務庁発行）に、瑩山禪師の伝記を執筆連載してほしいとの依頼が、当時、畏友、出

版課の細川祐葆課長（現曹洞宗宗議会議員）を通じてありました。私は、このご要望を快諾いたしました。昭和四五年六月号の『曹洞宗報』の巻頭に、「太祖常済大師六五〇回大遠忌記念」と銘打つて、「瑩山禪師伝」が載りました。

ところが、しばらく経つたある日のこと、突然、第二回以後の連載はまかりならぬという宗務庁要路の厳命なのだが、一と細川課長さんがいかにも申し訳なさそうに、私のところにおいてになりました。

これは、私にとって寝耳に水でした。ひとにものを頼んでおいて、一方的にこれを断わる——というのは、常識ではありません。連載中止の理由はといえば、一つは、『曹洞宗報』は瑩山禪師のことについて掲載するのにふさわしくない、いま一つは、文章のなかに、瑩山禪師の登場によって道元禪師の教えが生きた仏法となつて今日に伝わったといった意味の言辞があるのはけしからんといったようなことであつたと記憶しております。

宗務庁の幹部あたりからそのような指示が出てるので、申し訳ないが善処してほしいということでありました。細川課長も苦しいつらい立場であつたであろうと、私は、今も思っております。

ともあれ、細川課長のお話を聞いて、なにがなんだか、わけがわからない。私は、見事に、真正面から平手打ちをくらわされたわけであります。

連載中止の二つの理由は、今もって私には納得がゆきません。『曹洞宗報』は曹洞宗のいわば公報ですが、この公報に、大遠忌記念として両祖として位置づけているそのお一人の瑩山禪師の記事を必要に応じて載せて、宗侶の瑩山禪師理解の一助とするのはむしろふさわしいことと申してもよいのではないか。また瑩山禪師を顕彰するのあまり道元禪師をもち出して論することは、実は私のひとりよがりの意見ではあります、おもいつきの判断ではありません、一例をあげますと、江戸時代の有名な學僧、面山瑞方禪師は、「考レバ、瑩祖ノ二十八ノ伝法ノ時ガ徹通ノ満八十九ニアタル、モシ徹通ガ短命ナレバ、永祖ノ正脉ハコレギリヨ、一縷絲ノ羊ナト云フベシ、瑩祖ハ羅漢ノ應化ジャト伝ヘ言フガ、永祖ノ正伝ガ断絶セヌ羊ニトテ、瑩祖ト成テ應現セラレシ道理モアルベシ、ユヤウキ法脈ヨ、瑩祖ノ下ニ峩山ガ九十一マデ在世ニテ、二十五哲ガ出世アラレテ、日本一国ガ洞家ト成タ、明峯派ハ峩山ノ十分ノ一一モタラヌガ、近年ソレモ榮フ」（『大智禪師偈頌聞解』巻下、慧苗錄。傍点は東が付す）と言つております

高祖道元禪師と太祖瑩山禪師（東）

し、やはり江戸時代の禅匠、西来派の祖、徳翁良高禪師も、「今、洞家の寺院、溝に充ち壑に塞がる者、皆、これ総持の末流なり」といふ「瑩峯の二大士を得て緒を續がざれば、すなわち永平の門風、地を払つて尽きん」（『西来家訓』。原漢文）と述べています。もつとも、当時は、私は、こうしたすぐれた先人たちの言葉を論拠としていたのではありませんでした。ただ、面山瑞方禪師、徳翁良高禪師の右の意見を、その後において見つけたのです。お二人とも私とおなじことを言つてゐるなあと感じたわけです。偏見や党派根性をやめて、歴史をありのままにみると、眞実が把握できるのです。

が、若輩の私は、びっくりしました。当時、学監であった上田祖峯先生（現駒沢女子短期大学長）から、「駒沢学園で瑩山禪師の研究をやつている東というのは、いつたい何者だという電話が、宗務庁の某師からかかって来ています」と告げられました。

宗務庁の某師からの電話を上田先生から聞かれたのでしょ
う、学園長の小川弘貫先生は、私をよばれまして、「誰がなんといおうと、君は心配することはない。君は、太祖さまの研究をつづけなさい！」と、私の手を握つて、命令調で申されました。まさに、恩師の命令でした。この小川先生の一言

が、どれだけ私に勇氣と自信を与えることになつたか知れません。先生は、ほんとうに度量の大きいお方でした。そして、まだ海の者とも山の者ともわからない、吹けば飛ぶような若造を、本気になつて激励して下さつたのです。小川先生のような人を、世間では「親分」といいますが、そういう卑俗な表現ではとうてい言いあらわせない大親分であり、大先生でした。それは、先生が、世俗のいかなる権力にもビクともしない純粹な信仰と透徹した判断力と深い学問をたくわえておられたからでしょう。

小川先生に救われた人は、もちろん私ひとりではあります。たくさんいます。そのことを話していくと時間がありませんので、別の機会にゆずり、割愛します。

まあ、こんな、私にとつては大事件がありました。そして、これには後日譚があるのです。『曹洞宗報』の「瑩山禪師伝」の第二回の原稿をつきかえされて当惑していた私のところに、『大乗禪』誌（中央佛教社刊）主幹の秋月龍珉先生から、突然の電話がかかってまいりました。なにか寄稿してほしいといわれるのです。私は秋月先生とは一面識もありませんでした。

私は、例の「瑩山禪師伝」の話をもち出しますと、「じゃ

ア、『大乗禪』の方に、その原稿を下さい。連載いたしました。『大乗禪』は一宗一派の圧力などを受けることはありません。もし、あなたの論文に対しても意見があれば、それを『大乗禪』に載せるのみです。論には論をもつて対するのが妥当でしょう」とおっしゃって、第二回以降は、『大乗禪』に載せるようになりました。『大乗禪』の一九七一年一月号から一九七三年一二月号まで連載しました。これに修正、加筆をほどこし、『瑩山禪師の研究』と題して、昭和四九年、春秋社（神田竜一社長）から上梓したのです。捨てる神あれば拾う神ありとか申しますが、あのときの秋月先生の突然のお電話は、まさしく拾う神というわけで、實にふしぎなご縁です。ただ、あれだけ期待して下さった小川先生は、『瑩山禪師の研究』が刊行されるおよそ一か月まえの四月十日、立亡を示してご遷化になり、出版祝賀会にお出ましいただけなかつたことが、心残りであります。

次に、『伝光録』についてですが、『伝光録』の写本を全国に蒐集していた私は、京都府宇治市の興聖寺（道元禪師の初開道場）にもあるという古記録にもとづいて照会したところ、住職の植本勝道老師は、ずいぶんお調べいただき、更に滋賀県朽木の興聖寺にも調査の労をとつて下さいましたが、

結果は現存しないという返事でした。実にご親切な対応ぶりで、恐縮いたしました。

そのお手紙の中に、こんなことが書き添えてありました。今も保管しておりますが、だいたい次の意味のことです。

大正五、六年のころ、植本老師が曹洞宗大学林の学生のころ、夏休みを活用して、懸賞論文を、大学林が学生に求めた。そのとき、某先輩が『伝光録』について書いた論文が一等賞に入賞した。二、三等は、機関誌に掲載されたが、一等賞の論文は、公開するにさしつかえありとかいうことで公表されなかつた。だから、貴君の瑩山禪師研究、『伝光録』研究も苦労がともなうとおもうが、慎重にがんばつてほしいといつたことであります。

また、千葉県の某老師からいただいたある年の年賀状に、「瑩山禪師の研究は、宗門のタブーです。私も研究をやつてしまつたが、お叱りをうけました」と書いてありました。まだあるのですが、今日は、このへんでやめておきます。要するに、私の太祖瑩山禪師の研究をめぐつて、たいへん厳しい状況があつたのであります。

かつて、衛藤即応先生（駒沢大学総長）が京都大学に学位

高祖道元禪師と太祖瑩山禪師（東）

請求論文として提出されたのが、のちに岩波書店から出版されました『宗祖としての道元禪師』（昭和一九年）です。

ところが、この『宗祖としての道元禪師』という題名——「宗祖」という表現が、大本山總持寺の某老師からとりあげられました。宗祖とはなんだ、曹洞宗の両祖は高祖、太祖だ、太祖を忘れてはならん、ということなのでしょう。これが、先生の一路上の進退問題にまで発展しかかったことがあると、いうことを、茶話として、岡本素光先生（駒沢大學総長）からうかがったことがあります。

衛藤先生ご自身の回顧談として、「『宗祖としての道元禪師』も三版を重ねたが、あれを書いたときはたしか河合内局の時代で、危うくワシは破門されるところだった。しかしワシが『宗祖』という意味は一宗団の源頭に立つということで、道元禪師はただの禪門の一高僧ではないことは明かだ。これは瑩山禪師が規定したもので、伝光録にも「日本曹洞門の元祖」あるいは「初祖」とっている。ワシは瑩山禪師の本意を明らかにしただけだよ。だから『両祖一体』といつても太祖瑩山禪師が高祖道元禪師を宗祖とし「永平の宗風」をひろめて宗団をつくったのだから、その意味で一体が本すじだ」（「中外日報」昭和三三年七月二十四日付）とありますから、こ

れはまちがいないところでしょう。

私のことを言うのに、大先生の衛藤先生を引き合いに出することはまことに心くるしい申し訳のないことであります。おゆるし下さい。衛藤先生の場合は、それを問題としてとりあげた側からすれば、太祖瑩山禪師への冒瀆ということになりますのでしょうし、私の場合は、高祖道元禪師への冒瀆というつもりなのでしょう。

が、これは、とんでもない誤解であり、曲解であり、為にする偏見であります。

まあ、このごろは、よほどこうした無茶苦茶な暴論や圧力、いやがらせはなくなりつつあります。しかし、時として、まだまだ両祖一体への無理解ぶりが顔を出します。もう、こんな馬鹿げた騒ぎは、いい加減にやめてもらいたいものであります。

三

さて、これまで、曹洞宗において、高祖道元禪師と太祖瑩山禪師は、どのように位置づけられてきたものでしようか。二つの代表的な見解をあげてみましょう。

一つは、栗山泰音禪師（大本山總持寺独住第八世）の大著

『総持寺史』（昭和一三年、大本山総持寺刊）に示されてい
るところです。

栗山禪師は、「凡そ一宗の成立するには、宗旨の開顯と宗
門の開発との二原由がある」「宗旨は一宗の精神であり、宗
門は一宗の肉体である」とのべ、「我が日本の曹洞宗は永平
大師が興聖永平の両寺に依つてその宗旨を開顯せられたが未
だ宗門の開発はなかつた」「我が日本の曹洞宗は瑩山大師が
総持寺に依つて初めてその宗門を開発せられて、ここに一の
宗体が具はつたのである」「別に差別を立てるではないが、
若し仮りに要を約していへば、永平寺は主として法統の本山
であり、総持寺は主として寺統の本山である」「要するに永
平寺は崇高を特質とするの本山である。総持寺は広大を特質
とするの本山である。高きのみが尊といのではなく、広きの
みが貴といのではない、高さと広さと相俟つてここに高廣優
大の一宗となる、依つて一宗の本末たらんものは、ともに両
本山の各異りたる特質性格を尊重奉持すべきである」「我が
宗では永瑩二祖の対立（ここに対立とは両立の意味であつ
て、対決をあらわすものではないであろう。東）に依つて、
永平、総持の両本山が併立する」とあります。

栗山禪師には、独立した両祖論に関する論文のようなもの

があるわけではありませんが、右の文章から判断すると、栗
山禪師にとって、道元禪師は曹洞宗の精神であり、宗旨を開
顯した法統の祖であり、したがつてその開山地の大本山永平
寺は嵩高なる法統の本山ということになる、それから総持寺
は曹洞宗の肉体であり、宗門を開発した寺統の祖であり、し
たがつてその開山地の大本山総持寺は広大なる寺統の本山と
いうことになる——そのように主張されているとおもわれま
す。栗山禪師は、両祖を両立させ、両本山を併立させ、そこ
に曹洞宗の特質を明らかにされまして、両祖、両本山を同列
同格と位置づけられたのであります。

曹洞宗のお寺の住職で、檀信徒を大本山永平寺や大本山総
持寺に引率して参拝するとき、高祖道元禪師を曹洞宗のお父
さんだといい、太祖瑩山禪師を曹洞宗のお母さんだと説明す
る方があります。栗山禪師の見解に沿つたものであります
よう。これは、ひじょうに身近かな例でわかりやすいたとえ
なのかも知れません。

しかし、必ずしもそうではないぞというお考えのお方もい
らつしやるとおもいます。法統の祖とか寺統の祖とか、父と
母とか、そのように一宗の根源が二つあるから面倒になる、
紛争の種になる、一本化したらすつきりすると、誰でも一応

は思いつくからであります。

で、そういうお方には、ぜひ読んでいただきたい中世吉祥道老師（三重県正泉寺東堂）のご文章があります。先般、中世古老師から、「道元禪師の仏法——ある僧の私解——」（昭和六二年、中世古老師発行）というご著書を惠んでいただきました。いささか長い引用になりますけれども、おゆるし下さい。

「実は私には二人の母があつた。実母は北海道で、私はそこから後にかつての満州大連の父の下へ移つたが、そこには義母が居り、そこで得度して育てられたのである。

然し若氣の至りで義母とはしつくりしない間柄となつて、それだけに一人の母についてはいつも心を悩ましていた。それで母についての話は、なるべくさけていたものである。

ところで東京での学究生活を終え、いよいよ大連へ帰ろうとしたら、北海道の生母から、満州へ帰つたら、もう北海道へは遠くて来られないだろうから、その前に一度会いたいといふ切々の手紙をもらつた。大連の父母共心よく許してくれたので、北海道へ行くことにした。

そこで衛藤先生の宅へ「満州へ帰る前にちょっと北海道へ行つて来ます」と挨拶に伺つたら、先生はけげんそうに「君

が北海道へ。どうしてかな」と問われた。躊躇しながら「実は生みの母が居るんです」と答えたところ、先に義母に会い、これを生母とばかり思つていたらしい先生も合点がいったのか、「それはいい。一人の母があるなんて。一人の母さえ居らない人があるんだよ」といわれた。

私はここで眼がさめた。一人しかいない母を亡くしている人さえ居るのには、お前にはその母が二人もいるじゃないかと教えられた。今迄は二人の母がいまわしく、一人にしほろうなどと悩んでもいた者が、かけがえのない人が二人も居る宿縁を喜び感謝するようになり、二人の母を持つことが誇りにも思われて来たのである。

ここに、ものを見る新しい眼を与えられ、爾來、多くのことに当たつて、諸方から見られるようになつた。

宗門の成立 宗門の成立の理解には、種々の見解があるが、歴史的には、中国曹洞宗の流れを汲む如淨禪師の法を嗣いだ道元禪師が、帰國して日本曹洞宗の源頭に立つたが、その後、四代瑩山禪師の出世を見、その門葉が各地に宣教し、ついに宗門の確立をみたというので、両禪師を高祖・太祖としてあがめるというのが一般的理解のようである。

確かに歴史的にはそれを否定することはできまい。然し、

「信仰の帰趣」となる大本山は歴史の眼のみでとらえてはならない。信仰の面でとらえ、宗義の中では理解しなければなるまい。宗義というものは、屢々歴史の形をとるけれども、歴史即宗義とはならないのに、歴史の上では、初代道元禅師、四代瑩山禅師があるので、この日本曹洞宗の歴史をとつて宗義としようとするなら、そこに葛藤が生じてくる。学者はとにかくこれを歴史的実証的に見ようとする。それは学問の立場からは当然のことであるが、両禅師を両祖と仰ぎ、両山を信仰の帰趣にしようとする我々は、それに組みしてはなるまい。なんとなれば、我々は宗教者である限り、これを宗教眼で捉うべきで、歴史眼のみでとらえてはならないのである。

私はそこで、日本曹洞宗の歴史的流れの中で両祖を見るのも大切であるが、日本曹洞宗の宗憲の上からは、日本曹洞宗は高祖、太祖の両祖によって生み出されたものと理解したいのである。

いみじくも、誰によつて言い出されたものかは知らないが、両祖を父母にたとえているが、父なる高祖と母なる太祖によつて、日本曹洞宗という一子が誕生したと見るのである。

これでは、両祖並立て歴史を誤るとの批判もあるう。確かに

に両祖には歴史的先後は否定できないが、然し、「日本曹洞宗」という歴史からいつても、わが宗門は道元禅師一辺倒の道元宗ではない。道元宗とするなら、その宗名の呼称からしても、法儀行持の清規の現状からしても問題のあるところである。

それなら太祖によつて成立したかといえば、太祖は高祖をもつて「曹洞初祖」（瑩山清規）（瑩山清規に、日本曹洞初祖とあるのは、江戸時代の開板本にはじまるのであって、それ以前の数種の写本には、曹洞の二字はなく、日本初祖となつてゐる。瑩山禅師には、曹洞の宗名を称するということはなかつたのである。東註）「日本ノ元祖」（伝光録）となす以上、高祖をさしおくことは出来ない。そうなれば、両祖・両大本山とされるものは、歴史的なものよりも、宗教的看點に立たねばなるまい。

そこで、両祖で日本曹洞宗という教団を生んだとみてこそ、両大本山には先後も上下もおかず、信仰の帰趣となし得よう。父母としては、各々の個性もあり、又、出世の先後があるので、生活環境、時代の差も認められ、従つて両大本山にも特徴が出てくるが、親としては一体であるべきである。だから同じ家風に立たなくてはならない。

高祖道元禪師と太祖瑩山禪師（東）

両山護持のとりちがい ところが、もし親同志が主権を争つて仲互いを起こしたり、子ども達が一方の親をかついで党をなし、これを護持と思って相手側を誹謗しあうなどあつては、愚の骨頂であろう。自分の親の誹謗に気づいていないからである。況んやそのための利益誘導などに至つては、なにをかいわんやである。さらには、自派に組した者はよしとし、他派を疎外するなら、同じ血を分けた子に差別をつけるものである（中略）。

宗教者としての私たちは、その大本山がどのような歴史を持つにせよ、共に親の家なのである。我々は却つて、両祖をもち、両大本山を持つことを喜びとし、誇りとする宗門人にならねばなるまい。二つあつては面倒だ。二人あつては邪魔だというのでは、宗教人とはいえない（中略）。

永平寺系は道元禪師の仏法を弘めた太祖（母）の功を、総持寺系は、瑩山禪師の信服した高祖（父）の徳を、相互に讃えあってこそ、ここに始めて本山が檀信徒の信仰の帰趣ともなり、家庭仏法の本基ともなるう（若干、改行した。傍点は東が付す）。

中世古老師は、『宗憲』を宗侶としての信仰の立場から、両祖と両大本山に先後や上下の差をつけないで、ともに並立

してうけとめるべきであると主張されるのであります。これは栗山禪師の主張を汲むものと理解されるわけであります。

ただ、老師は、宗義と歴史のことにつれておられます。これは衛藤即応先生の「歴史と宗義」という論文が反映しているものと思われますが、両祖の問題については、歴史に仮託したり歴史を歪曲したり、飾り立てたりして論ずる必要はないと思います。

貴学の竹内道雄博士は、「能本山分離独立運動」の教訓」という論文のなかで、

「そもそも曹洞宗教団は、興聖寺、永平寺において、高祖道元禪師が教団の最高、最奥の教義と厳正な只管打坐にもとづく行持を完成され、大乗寺、永光寺、総持寺において、太祖瑩山禪師が、道元禪の布教開展の時代的即応の内外形態の源流を形成され（教義の民衆化、輪住制度制定などの教団の組織化）、この両祖の力、永平寺、総持寺を中心とするこれら宗門の古刹の恩恵のもとに教団は大発展をとげてきたのである。

中世末から近世にかけての永平寺の復興は、道元——瑩山——通幻——了庵の法系を汲む曇英慧応等の昇住によつ

て成就した。そして曹洞宗教団史の主流は総持寺教団であることは、厳たる歴史的事実であり、またその総持寺の開山瑩山禅師は、道元禅師の正伝の仏法の法燈を純乎として継承された方である。

また永平寺は、道元禅師が中心となり、孤雲懷奘・徹通義介・寂円・義演・寒巖義尹等教団の中核となつた諸龍象を打出した宗門の根本道場である。このように歴史的にこれを見るならば、両祖一体、両山一体の信仰を宗門人が抱くのは当然のことであり、ここに曹洞宗教団が高祖道元禅師、太祖瑩山禅師を両祖とし、永平寺・總持寺を二大本山と仰ぐ他宗門には見られぬ特異な、またすぐれた形態が形成された歴史的理由がある。『（傍点は東が付す）とのべておられます。』

実際、日本の初期曹洞宗の歴史、人物、思想、組織、任務、位置、評価などの事実をしらべてゆけばゆくほど、両祖ないし両大本山の成立とその意義に深く思いをいたらしめられるのであります。宗義を歴史によって仮託する必要はなく、歴史が宗義の真実を展開しているのであります。

そこで、「すでに正伝の仏法の本旨を体得し、百千の英傑、千古の模範として永平の宗風を挙揚する太祖であるならば、宗門の命脈に於ては両祖一貫の信念がなければならぬ（中略）。両祖一体の宗門安心の基本は、本枝一如の正伝面授で、如來の身心ただ祖門に正伝すといふ道元禅師の仏法の根本精神に於て、両祖は正しく一体に結ばれていなければならぬのである。（中略）されば両祖は礼拝の対象としては

衛藤先生は、まず「高祖道元禅師を法統の祖とし、太祖瑩山禅師を寺統の祖として、両祖一体の特異なる歴史的性格の下に、日本曹洞宗という一宗団が成立した」とのべておられます。これは、栗山禪師の主張するところであります。衛藤先生は、これを一応はお認めになつておられます。

いま一つは、さきにもちよつと触れましたが、衛藤即応博士がその著『宗祖としての道元禅師』の第八章「高祖と太祖」で唱えておられるところであります。

高祖道元禅師と太祖瑩山禅師（東）

空間的に対立しながら、面授の信念の上からは時間的の連續であり、時間的連續でありながら空間的対立であつて、始めて正伝面授を生命とする曹洞宗の安心が確立するのである」とあるように、高祖道元禅師から太祖瑩山禅師へ時間的に連続して一貫して面授正伝されているところの両祖の同一性を宗門安心のうえに確認しなければならないといわれているのであります。

以上、近代曹洞宗における二大巨匠、栗山禅師と衛藤博士の両祖論を手みじかにご紹介したのであります。

私は、栗山禅師のは、高祖、太祖を対等にし、父母とした両祖並列論とよんでおきます。また衛藤博士のは、高祖道元禅師を主として、先とし、父とし、太祖瑩山禅師を従として、後とし、子とする両祖従列論とよんでおきます。

こういうよび方が妥当であるかどうかはご批判を頂かなければなりませんが、ともあれ、栗山禅師は教団史の角度から両祖を横に並べて両祖一体論を展開されており、衛藤先生は思想、信念の視点から両祖を縦につないで両祖一体論を説かれていると評してもよいのではないかと思われるのであります。

太祖に限つていいますと、瑩山禅師はただ教団を発展に導いた祖師というふうにのみうけとめてよいのだろうか。教団の大成者としての瑩山禅師がクローズアップされるあまり、宗旨の繼承者としての太祖がかくれてしまつたうらみはないだろうか。高祖道元禅師から太祖瑩山禅師へ連続一貫する正伝面授の仏法を強調されなければならなかつた衛藤先生のお立場から出てくるひとつ必然性を、私はここで思わずにはおれぬのであります。

しかし、その衛藤先生のご見解であります。高祖道元禅師と太祖瑩山禅師との同一性のご指摘はなされました。そこから太祖瑩山禅師の正伝面授の根基を高祖道元禅師に据えられるのは当然であります。しかば、なぜに瑩山禅師のみが、後世の法孫から太祖という尊号をもつてよばれなければならぬのか、その歴史的思想的必然性が明らかにされなければ、なお不徹底のそしりをまぬがれえないのではないか。

栗山禅師が、高祖道元禅師を法統の祖とし、太祖瑩山禅師

私は、ここで両大先達を批判しようとしているのではない

ません。そうではなくて、後の法孫、学徒である私たちが、先覚から課せられた研究テーマがこのへんにあるのではないかと思つてゐるのみであります。誤解のないように申し添えておきます。

四

私は、栗山禪師、衛藤先生によつて代表される曹洞宗における一つの両祖論を、ながい間じつと見つめておりました。じつと見つめて見つめているうちに、私のような愚鈍な者にもおぼろげながらに、そのご趣旨の特長と限界がわかつてしまひました。そして、それぞれのご説の背景事情も見えてまいりました。あらためて、両祖論のむつかしさを痛感いたしました次第でございます。

私は、初期の日本曹洞宗学思想史を専攻し、高祖道元禪師から太祖瑩山禪師の前後および周辺を主として討究しているのです。その前提として、とりあらず日本史、日本文化、日本仏教思想全体に通ずるだけの広い理解が必要でしよう。もつといえは、インド仏教、中国仏教のひととおりの常識ももあわせていなければならないでしよう。そのことについていまは、いま触れたいのですが触れている余裕がないのは残念な

ことです。

いま、まず、初期日本曹洞宗の史料、資料を蒐集し、吟味しなければならないという問題があります。

ご承知かとおもいますが、室町時代から安土桃山時代の曹洞宗の宗学は暗黒時代だといわれています。その以前の、とくに高祖以後から太祖前後までの史料、資料も、その量において僅少であります。有るには有つても史料、資料に関する厳正な検討や批判は、これまで必ずしも十分とはいえなかつたと私はうけとめています。ですから、私は私なりにメスを加えてゆかなければならぬ。

次に、高祖道元禪師から太祖瑩山禪師へ至る曹洞宗僧団の歴史的成立、推移、ないし特質といったことなどについて明らかにしてゆかなければなりません。

次に、高祖から太祖への宗旨の受容、継承、展開をしらべてゆかなければなりません。

このようにして、つまるところ、高祖から太祖へ連続しこ貫し共通している宗旨の本義と宗団の実態を追求してゆく、あわせて高祖から太祖へ歴史的、社会的に伸長し拡張してゆく宗団の実態と宗旨における両祖の相違点、独創性を探求してゆくのであります。

高祖道元禅師と太祖瑩山禪師（東）

ここにおいて、私は、冒頭で申しあげましたように、高祖と太祖を、従来のように個別に見ない、切り離して考えない、平面的、単眼的にながめようとはしないのです。そうではなくて、両祖を同時的に、複眼的に、雙照的に、立体的に、運動的に仰ぐのであります。これは、永いあいだの私の苦しみが、おのずからそういう方向になつてゆき、そこで一条の光明を見いだすに至つたのであります。

高祖道元禅師を観るに太祖瑩山禪師を以つて観る、太祖瑩山禪師を観るに高祖道元禅師を以つて観るのであります。

それは期せずして、すでに衛藤先生が「太祖を通じて高祖を見、高祖を通じて太祖を見るのであって、決して両頭の蛇になつてはならぬ」と喝破されているところと軌を一にしているところであります。正直なところ、わながらおどろいている次第であります。

ただ衛藤先生は、『宗祖としての道元禅師』の時点ではご自身がおっしゃつておりますように、高祖と太祖の同一性の面しかスポットライトをあてておられない、相違点、独創性の面はしばらく措かれたのです。けれども、相違点、独創性の面を掘りおこしてゆかなければ、瑩山禪師が太祖と仰がれる必然的、積極的意義がぼやけてくる、そこが後來の私たち

に課せられたテーマだと前に申しあげたゆえんであります。

このように、高祖道元禅師、太祖瑩山禪師を同時的に、複眼的に、雙照的に、立体的に、運動的に研究し参究してゆくことによつて、両祖一体の宗旨における安心と兩山不二の教団を現実に運営してゆくありようを確立してゆく手がかり、事実の認識、真実の発見、宗門人としての反省および将来の展望などなどのいとぐちがえられるのではないかと思うのであります。

また、このような立場に立つてみると、学問的にも信仰的にも、従来の高祖像、太祖像とはちがつた両祖像を発見することができるのでないかと思うのであります。空理空論に走らない、偏見に流れない、私たちの生きてゆく源泉となるような高祖道元禅師、太祖瑩山禪師のおすがたを確認できるのではないかとおもうのであります。

いつたい宗学とは、宗を学ぶことであります。宗とは、いのちの中心、いのちそのものであります。それを学ぶ。曹洞宗であるならば、高祖道元禅師、太祖瑩山禪師のうえに、宗を学ぶ。それが曹洞宗学の根本であります。両祖の宗が現実の宗団のうえにどのように成立し、展開して現代に至つておるか。現実の宗団において、両祖の宗がある時はまつすぐ

に、ある時はひんまがってすがたをあらわすことがある。それらをひとつひとつ両祖の宗にてらしあわせながら考えてみる必要もある。そして、現実のわが足もとをふりかえる。そこから、前向きの展望を開いてゆく。そういうのが曹洞宗学を学ぶ者の基本的姿勢でしょう。

宗学といえども学問であるのだから、客観的に批判的にすすめてゆかなければならない。宗学は信仰、主觀であつてはならないなどという意見もあります。たしかにそれはそのとおりといえる面もありますが、そういうレベルにとどこおつているかぎり、これから曹洞宗学はなりたたないでしょう。事実を確かめ、眞実を明らかにしてゆくのに、主觀的も客観的もありません。冷徹なまなこと深いこころとが一つにならなければなりません。

そういうことで、私が、これまで宗門や学界に問うてきた高祖道元禪師研究、太祖瑩山禪師研究のものもの論文、著書、講演はすすめられてきているのであります。具体的なことは、どうか、失礼ながら、それらをご高覽いただくことにして、この席では時間の都合上、省かせていただきます。

このような機会をもうけていただきました愛知学院大学ご当局に深い感謝をささげつつ、つたない話を終ることにしま

す。

ご清聴、まことにありがとうございました。

(昭和六二年七月三一日夜擱筆。文学博士、駒沢女子短期大学学監、教授)